

「日本の年輪 風雪二十年」について

1 放送リスト作成の経緯

平成28年4月～平成30年3月にかけて、BS11にて「あのスターにもう一度逢いたい」（司会：宮本隆治、アシスタント：高野萌）という1時間番組が放送されていた。この番組は、昭和の大スターを毎回1人ずつ紹介していくという番組であったが、歌手が取り上げられる回が大半であった。

計100回の放送のうち、筆者は数回分を観ただけに過ぎないが、第49回の岡晴夫特集（平成29年3月28日放送）で使用された貴重映像が印象に残っている。岡の映像というと、昭和20年代～30年代前半にかけての映画出演と、晩年の昭和44年～45年に東京12チャンネル（現・テレビ東京）「なつかしの歌声」に出演した歌唱映像しか現存していないと筆者は思い込んでいた。「なつかしの歌声」に出演している岡は、痩せこけた身体でやつれているのが印象的であったが、平成29年3月28日のこの日に放送された岡の白黒映像は筆者が初めて見るもので、「なつかしの歌声」の映像と比べ若々しく身体もふっくらと健康体であり驚いた。「上海の花売り娘」と「港シャンソン」を歌っていたのだが、映像提供は日本テレビとクレジットされていた。

この岡の映像について、「なつかしの歌声」研究の第一人者であるH氏のブログ「日々是口実」には、昭和35年に放送された「風雪二十年」という番組が出典ではないかとの推測記事が載っていた。「なつかしの歌声」の放送開始は昭和43年で、現存する映像が残っているのは昭和44年以降の放送分のみである。昭和44年に放送されたテレビ番組の映像が現存しているということ自体貴重であるが、そこから更に10年弱遡った昭和35年のテレビ番組の映像が残っているとは露ほども思わず、強い驚きを覚えた。

また、第67回の東海林太郎&藤山一郎特集（平成29年8月1日放送）において、東海林の「上海の街角で」と「お夏清十郎」の白黒の歌唱映像が流れたが、こちらも初めて見る映像であった（筆者は見逃したのだが、第53回の放送で東海林の単独特集が組まれているため、第67回の放送は総集編であったようだ。）。こちらも前述のH氏のブログ記事によると、やはり「風雪二十年」の映像であろうとのことであった。

「風雪二十年」のことを少し調べたところ、番組の正式名は「日本の年輪 風雪二十年」であることと、基本的にはドキュメンタリー番組であり、たまに歌謡特集が組まれることがあったに過ぎないということが分かってきた。したがって歌謡番組ではないのだが、「なつかしの歌声」を筆頭とするなつメロテレビ番組が隆盛を極める昭和40年代よりも前の時代に、どのような形でテレビにおいてなつメロ特集が組まれたのかということが気になった。そして、調べ上げるからには歌謡特集の回だけではなく、全放送回を調べようと決意した。以上が今回「日本の年輪 風雪二十年」の放送リストを作成しようと思いついた経緯である。

2 番組詳細

（1）日本テレビ社史

まずは、当番組の制作局である日本テレビの社史にどのように記載されているのかを紹介したい。

日本テレビでは昭和53年に初の本格的な社史『大衆とともに25年＜沿革史＞』が発行されたが、この本の中では、社会教養番組の一分野であるドキュメンタリー番組の1つとして紹介されている（同書183ページ）。また、巻末には25年間の週間番組表が約半年ごとのスパンで断片的に掲載されているが、これを見ると、同番組のスポンサーは放送開始時から終了時まで一貫していすゞ自動車であったことが分かる。

そして、平成16年発行の社史『テレビ夢50年 番組編①1953～1960』においても、「昭和の変遷を多彩な記録フィルムで綴った（中略）「日本の過去・現在」を見つめる良質のドキュメンタリー」番組と紹介されている（同書41ページ）。また、同じページには番組のスチール写真が掲載されており、次のように詳細な番組紹介がなされている。

『日本の年輪・風雪二十年』

1959. 10. 3～1961. 11. 11（土）22:15～23:00

司会：田鶴浜弘、別当珣子

貴重な記録フィルムを駆使した＜映像で振り返る戦後の動乱史＞。ドラマ、座談会を織り混ぜたバラエティに富んだ構成が、単なる記録フィルムの寄せ集めに終わらないテレビならではのドキュメンタリーの方向性を示した。

この番組紹介には、放送期間と司会者が明記されているが、必ずしも正確な情報ではない。この点については、（2）～（4）で説明したい。

（2）放送期間

『テレビ夢50年 番組編①1953～1960』には、放送期間は昭和34年10月3日～36年11月11日と記載されており、これは正しい説明である。初回・最終回ともにサブタイトルは「走馬灯」である。

ただし、最終回の翌週の昭和36年11月18日には同じ時間帯に「風雪二十年とその後」、翌々週の25日には「蒸気からジェットへ（車の歴史）」という単発番組がそれぞれ放送されており、いずれもレギュラー陣の古谷綱正と上月左知子が出演している。よって、この2回の放送は同番組の派生番組と考えられるため、回数にカウントしない形で放送リストに記載した。

ちなみに、番組の開始を伝える各新聞テレビ欄には、放送期間は約1年半であるとの記載が見受けられる（昭和34年10月3日付読売新聞東京版朝刊、同日付毎日新聞東京版朝刊・夕刊、同月17日付朝日新聞西部版・名古屋版朝刊）が、実際には2年2か月間放送された。番組開始時には1年半で終える予定だったが、何らかの理由で放送期間を半年強延長したのだと考えられる。

（3）放送日時

『テレビ夢50年 番組編①1953～1960』には、毎週土曜日22:15～23:00に放送されたと記載されている。毎週土曜日に放送されたという記述は正しいものの、22:15～23:00という時間帯はあくまでも初回の放送時間帯を指しており、第2回目以降はほとんどの回において22:00～22:45に放送されている。

22:00～22:45以外の時間帯で放送された回は、初回以外には第36回（昭和35年6月4日、22:15～23:00）と、15分拡大して放送した第66回（昭和35年12月31日、22:00～23:00）のみである。

（４）司会者

『テレビ夢50年 番組編①1953～1960』には、田鶴浜弘と別当珣子の2人が司会者であったと記載されている。実際、放送初回の日々の新聞テレビ欄には、同番組のレギュラーのホストが田鶴浜弘（元報知新聞記者で現在「ファイト」誌社長のスポーツ記者）、ホステスが別当珣子（大毎オリオンズ監督の別当薫夫人）と紹介されている（昭和34年10月3日付読売新聞・毎日新聞各東京版朝刊）。しかしながら、新聞テレビ欄の日時を進めていくと、田鶴浜弘が出演していることが確認できたのは第20回（昭和35年2月13日）までで、第25回（昭和35年3月19日）以降は古谷綱正がレギュラーホストとして出演している。別当珣子に関しては、出演していることが確認できたのは第35回（昭和35年5月28日）までで、第38回（昭和35年6月18日）以降は上月左知子がレギュラーホステスとなっている。

以上から、レギュラーホストに関しては、第21回から第25回、レギュラーホステスに関しては、第36回から第38回のそれぞれいずれかのタイミングで切り替わっていることが分かる。

（５）収録形態

当番組が生放送だったのか、それとも収録番組だったのかに関しては、社史や放送当時の新聞紙面に直接の言及はない。しかしながら、以下の材料から推測することができる。

その材料とは、『古川ロッパ昭和日記』の記載である。古川は当番組放送期間中の昭和36年1月に亡くなっているが、第6回（昭和34年11月7日）、第14回（昭和35年1月2日）、第32回（昭和35年5月7日）と、番組前半期に計3回出演している。この際の出演の様子が古川の日記に記されている。

該当箇所を引用したい。まずは、昭和34年11月7日の日記より。

十一月七日（土曜）雨後曇

NTV「風雪二十年」。

（中略）

九時三十何分、タクシー、NTVへ。「風雪二十年」の「赤い灯青い灯」の巻で、なつかしのメロディー式に、古いところを歌ふ。藤原義江・勝太郎・古賀政男・渡辺はま子等揃ってゐる。十時、本版となる。藤原義江、「どんと／＼」を歌ひ、その声のいゝこと、驚く。ところが、これは昔のレコードの由、ネタきいて、へゝエ、そんなこともやるのか。僕のところは、「たばこのめ／＼」と「アラビヤの歌」、

日記中の「九時三十何分」や「十時」というのは午後のことを指している。よって、この回は生放送であったことが分かる。

続いて、昭和35年1月2日の日記より。

一月二日（土曜）晴

NTV「風雪二十年」VDT。

(中略)

十一時半すぎ、タクシー、出る、NTVへ。「風雪二十年」、夢声・金語楼に、玉川一郎が司会役。僕は夢声のすゝめで、弁士の声音を三つ四つやることにする。スタジオへ入り、本版、金語楼の落語「兵隊」が面白い。夢声のロイドの「巨人征服」の一部分説明から、僕が玉井旭洋・大辻司郎・大蔵貢・山野一郎・生駒雷遊を一寸づゝ鳴いた。これで了り、今夜も、家で淋しく飲む気だったが、片山君が来り、NTVの送り車で、津田も共に浅草へ。

日記中の「十一時半すぎ」というのは午前のことを指している。よって、この回は当日の昼に収録したものを夜に放送したことが分かる。

なお、古川は同番組の昭和35年5月7日放送分にも出演しているが、前後の日の日記に記載はなく、出版する際にカットされたものと思われる。

以上より、当番組は生放送の回と事前収録の回の両方が存在していたということが分かる。筆者の推測に過ぎないが、放送開始のごく初期は生放送だったが、次第に事前収録に移行したのかもしれない。(社史『大衆とともに25年<沿革史>』には、「開局後数年間は、フィルム、スタジオからの生放送、生中継だけの放送であったが、33年12月、モノクロ用のVTR (Video tape recorder) が導入され、VTR時代が開幕した。」(390ページ)との記述がある。)

(6) 全国同時放送

朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱでは、朝日新聞の東京版・大阪版・西部(=福岡)版・名古屋版の過去の各紙面を閲覧することができる。これを元に調べた結果、当番組は制作元の日本テレビ(関東広域圏)の他に、読売テレビ(近畿広域圏)、東海テレビ(中京広域圏)、テレビ西日本(福岡)、南海テレビ(愛媛)、山口テレビ(山口)及び大分放送(大分)で少なくとも放送されていたことが分かる。そして、これらの地方局においては、いずれも概ね関東広域圏と同時放送が行われていた。また、当時北海道に在住していた方が北海道放送で視聴していた旨を個人ブログに書いている(「日本テレビ「日本の年輪」の思い出」)。以上から、当番組は全国各地で同時放送が行われていたということを推察できる。

なお、概ね同時放送が行われていたものの、一部そうではない場合も散見された。確認できた範囲内で箇条書きしたい。

- ・東海テレビでは、第2回(昭和34年10月10日)から放送を開始している。当番組の放送開始直前の9月26日に伊勢湾台風が和歌山県に上陸し、東海地方では被害が生々しかった時期である。東海テレビで初回分が放送されなかったことに、このことが影響しているのかどうかは不明である。

- ・各地域で第33回が放送された昭和35年5月14日の東海テレビでは、なぜか第6回分(昭和34年11月7日)を再放送している。以降東海テレビでは、同年9月24日まで、他地域よりも1週間遅れで放送した。(よって、第52回放送分は東海地方では放送されなかった。)

- ・各地域で第81回が放送された昭和36年4月15日の大分放送及び東海テレビでは、なぜか前週の第80回分を再放送している。以降大分放送及び東海テレビでは、第111回の最終回まで、他地域よりも1週間遅れで放送した。

・最終回の後の2回分の単発番組の放送に関して、大分放送では「蒸気からジェットへ（車の歴史）」が放送されていない。他方、東海テレビでは「風雪二十年とその後」が放送されていない。

以上、放送リストと合わせてご確認いただければ幸いである。同時放送が行われていない事例が散見されるという事実からは、この番組が（生放送か事前収録かは別として）VTRに収録されていたということを推察できる。

（7）放送内容

社史『テレビ夢50年 番組編①1953～1960』での紹介記事を（1）に載せたが、放送開始当時の新聞紙面にも次のように紹介されている。

昭和の初期から敗戦に至るまでの、昭和の二十年間の日本の動き、世界の動きを当時の数々の記録フィルムを使って約一年半にわたってつづる異色のドキュメンタリー「目で見る昭和史」。

全体としては「解説と記録フィルム」という構成をとるが、記録フィルムだけで、史実のつながらない場合は、ドラマの形をとったり、ゲストの懐旧談、当時のムードを再現する歌謡曲やファッションなどを組み入れ、バラエティーに富んだ構成にする。

（昭和34年10月3日付読売新聞東京版朝刊）

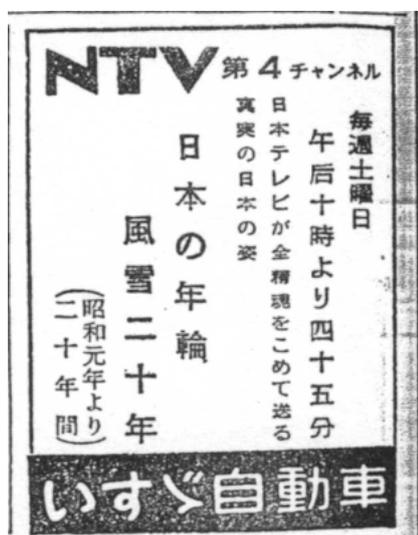
昭和のはじめから敗戦までの二十年間の日本の動きや世界の移り変わりを約一年半にわたってつづる。

（中略）

全体としては解説と記録フィルムを使う構成になるが、記録フィルムだけではむりな話題もあるので、そんなときにはドラマやゲストの懐旧談、当時のファッションや歌謡曲なども入れバラエティーに富んだものにしたいと制作担当の加登川教養部長は語っている。

（昭和34年10月3日付毎日新聞東京版朝刊）

また、昭和34年10月10日付読売新聞東京版夕刊5面に番組広告が載っているので、以下に図示したい。



番組のタイトルである「風雪二十年」の「二十年」が敗戦までの「昭和の二十年間」を指しているという事実が分かる。

そして、昭和34年10月3日付の読売・毎日両東京版朝刊の紹介記事のとおり2年2か月にわたって進行していったことが放送リストから読み取れる。

まず、「日本の動き、世界の動きを」とあるとおり、満州などの外地を含めた日本の動きを特集した回と、欧米列強の動きを特集した回とに区分される。総合的には、双方とも軍隊や軍部の動きを特集した回が多いように思われる。また、例えば第7回（昭和34年11月14日）から第10回（昭和34年12月5日）にかけて満州特集、第26回（昭和35年3月26日）から第27回（昭和35年4月2日）にかけて昭和維新特集、といった具合に、1つのテーマを複数回で特集することも少なからず存在していたようである。

次に、「ドラマの形をとった」回である。ドキュメンタリー番組と言いながら、何人もの俳優が出演しドラマの形をとって放送された回がいくつも確認できる。特に、第63回（昭和35年12月10日）、第68回（昭和36年1月14日）、第106回（昭和36年10月7日）の各放送分に関しては、新聞紙面に詳細な紹介記事が載っており、詳しく放送内容を記述することができた。なお、当時はテレビドラマと言えれば収録にVTRではなくフィルムを使っていた時代であり、本番組においてもフィルムが使われている。

最後に、筆者が当番組の放送リストを作成するきっかけとなった「歌謡曲」を特集した回を紹介する。

古川ロッパが日記に記した第6回（昭和34年11月7日）がその最初で、以降第32回（昭和35年5月7日）、第44回（昭和35年7月30日）、第65回（昭和35年12月24日）、第95回（昭和36年7月22日）、第100回（昭和36年8月26日）と、歌手が出演して歌声を披露した回は計6回である。わずか6回であるが、当番組がドキュメンタリー番組であることを考えると、“6回も”と表現した方がよいだろう。（なお、「芸能関係の特集」と定義範囲を拡げると、第14回（昭和35年1月2日）や第24回（昭和35年3月12日）もカウントされることとなり、更に増える。）

第1章で言及した岡晴夫と東海林太郎は、第44回（昭和35年7月30日）に出演している。同日の毎日新聞東京版夕刊には、「昭和十二年から十四年にかけてのなつかしのメロディーをたどる」と紹介されており、岡が歌った「上海の花売り娘」と「港シャンソン」はいずれも昭和14年、東海林が歌った「上海の街角で」が昭和13年、「お夏清十郎」が昭和11年の作品であることを考えると、この日の映像である可能性が高いと言えるのではないだろうか。

3 番組が放送された昭和30年代半ばという時代

当番組が放送開始してまもない昭和34年11月14日付朝日新聞西部版朝刊のテレビ欄に、「ハンランする戦記物」と題する興味深いコラムが掲載されている。このコラムでは、「日本の年輪 風雪二十年」以外にも、フジテレビ「これが真実だ」、東京テレビ（現・TBSテレビ）「昭和軍閥史」など、戦争回顧物のテレビ番組がこのところ目立ってきたことを伝えている。同記事によると、ラジオ番組も同様の傾向にあるという。他にも、日本教育テレビ（現・テレビ朝日）では「太平洋戦争」が昭和35年10月から、東京

テレビでは「チャーチルの大戦回顧録」が昭和36年5月からそれぞれスタートしているし、NHK総合テレビでは「世紀の記録」という、アメリカCBSとイギリスABCの両放送局が提供する、20世紀に入ってから戦争を中心に世界中の色々な事件を収めた記録映画の番組が昭和35年4月にスタートしている。

戦争回顧物の番組だけでなく、流行歌を題材とした回顧物の番組も多数登場している。テレビではNHKの「歌は生きている」が昭和35年4月にスタートし、日本教育テレビでは「歌謡百年」が昭和36年4月にスタート（先述の「太平洋戦争」の後続で、東京12チャンネルが昭和40年に放送した同名番組とは別物）している。ラジオでも文化放送の「あの夢この歌」が昭和35年11月にスタートしている。昭和30年代半ばのこの時期には、まだ「なつメロ」という用語は普及しておらず、代わりに「なつかしのメロディー」という用語がしきりに使われている。そして流行歌界では、若手歌手が戦前の歌を現代風のリズムにアレンジして再登場させる「リバイバル・ブーム」の真っ只中であつた。

昭和40年代に入ると、東京12チャンネルの番組に限定しただけでも、回顧物の番組として「私の昭和史」や「人に歴史あり」が登場しているし、なつメロブームの引き金になった「なつかしの歌声」も登場している。そして、明治維新から100年になることを祝う「明治百年」のブームが起きたのも昭和40年代に入ってからである。今回、「日本の年輪 風雪二十年」の放送リストを作成していく過程で、既に昭和30年代半ばのこの時代に、戦前を回顧する強い流れが生まれていたことが実感できた。昭和30年代半ばのこの流れが40年代に向かってどのように繋がっていったのかを検証することには深い意義があると思われる。今後の課題としていきたい。

4 参考文献

(1) 新聞

「朝日新聞」東京版、大阪版、西部版、名古屋版

「読売新聞」東京版

「毎日新聞」東京版

(2) 書籍

『大衆とともに25年<沿革史>』（日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編，1978）

『テレビ夢50年 番組編①1953～1960』（日本テレビ50年史編集室編，2004）

『古川ロッパ昭和日記 補完・晩年篇』（古川ロッパ著・滝大作監修，1989）

(3) ウェブサイト

「あのスターにもう一度逢いたい」番組公式サイト（令和2年9月22日確認）

<https://www.bs11.jp/entertainment/anostar/>

「日々是口実」（平成29年4月26日確認）

<https://plaza.rakuten.co.jp/torazou/>

「日本テレビ『日本の年輪』の思い出」

<https://ameblo.jp/sayamayotarou/entry-12086221460.html>（令和2年9月22日確認）